

令和４年度国立淡路青少年交流の家教育事業 実施報告

令和４年度全国中学生・高校生防災会議「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」 報告書

1. 目 的 地震や火山噴火、水害など様々な災害が頻発している日本において、これからの防災や減災の担い手である全国各地の中学生・高校生を対象に、今後の防災や減災について考える機会を設け、人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指す。
2. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構
3. 主 管 兵庫県立舞子高等学校 国立淡路青少年交流の家
4. 特別協力 公益財団法人上廣倫理財団
5. 後 援 文部科学省、兵庫県、兵庫県教育委員会、徳島県、徳島県教育委員会
6. 日 程 令和５年１月１３日（金）～令和５年１月１５日（日）
※遠方からの参加者は、１月１２日（木）から国立淡路青少年交流の家に宿泊
7. 場 所 兵庫県立舞子高等学校（兵庫県神戸市垂水区学が丘３－２）
国立淡路青少年交流の家(兵庫県南あわじ市阿万塩屋町７５７－３９)
人と防災未来センター（兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通１－５－２）

8. 参 加 校 23 校

岩手県立釜石高等学校、宮城県気仙沼向洋高等学校、宮城県涌谷高等学校、桜美林高等学校、新潟県立糸魚川白嶺高等学校、暁中学校・高等学校、京都市立塔南高等学校、兵庫県立尼崎高等学校、兵庫県立尼崎小田高等学校、兵庫県立三田西陵高等学校、兵庫県立松陽高等学校定時制課程、兵庫県立須磨友が丘高等学校、兵庫県立宝塚東高等学校、兵庫県立西宮高等学校、兵庫県立舞子高等学校、兵庫県立三木北高等学校、南あわじ市立南淡中学校、徳島県立川島中学校、徳島県立鳴門高等学校、高知県立大方高等学校、長崎県立諫早高等学校、熊本県立第二高等学校、大分県立佐伯鶴城高等学校

9. 参加人数 95 名（中学生 9 名、高校生 49 名、教員 23 名、視察者等 14 名）

10. プログラム内容

1月12日（木）（会場：国立淡路青少年交流の家）

【交流会】

参加者の緊張をほぐすことを目的とし、淡路島や参加者の出身都道府県に関するクイズを行った。また、クイズを通して、知識を共有することの大切さを実感するとともに、今回の事業では知識を共有する

姿勢を大切にしたいことを伝えた。最後は、「防災ジュニアリーダーとはどんな人？」と問いかけ、それぞれが考えた防災ジュニアリーダー像について意見を共有することで、これから始まる合宿への意識の切り替えを行った。



1月13日（金）

【震災メモリアル行事】（会場：兵庫県立舞子高等学校）

舞子高校で開催された、「1.17震災メモリアル行事『阪神・淡路大震災を忘れない～21世紀を担う私たちの使命～』兼ひょうごユース防災・減災ワークショップ」に参加した。

○開会行事

はじめに、阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼する黙祷が行われた。次に、兵庫県立舞子高等学校長久保敬より、本事業の趣旨等を説明する開会の挨拶が行われた。



○追悼演奏

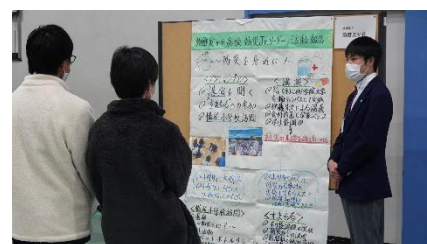
シンガーソングライターの asari 氏による追悼演奏が行われた。ご自身も東日本大震災で被災した経験があり、その過程で感じたこと、考えたことを「歌」という形で参加者に届けた。

○全体会（講演）

東日本大震災の語り部である雁部那由多（がんべなゆた）氏による「忘れない 未災者のわたしたち～語り継ぐこと、記憶すること～」と題した講演が行われた。はじめに、小学校5年生のときに被災した経験と、自身が中学生で語り部になったきっかけを語っていただいた。その中で、『被災地はやがて「未災地」となり、地域が被災の経験を失っていく。震災の経験は自身の心の中にあるだけだと辛い記憶だが、誰かに伝えることで価値のある情報になる。』と述べ、語り継ぎの意味を示していた。また、「語り」の先には行動を起こすことが大切であると述べ、参加者に行動を起こして欲しいと訴えていた。

○分科会

分科会は20ブースに分かれて実施された。高校生による活動発表や近隣大学・企業による講演・ワークショップ、語り部団体による震災体験の講話などが行われた。参加者は事前に配布されていた資料に記載された各ブースの内容をもとに、それぞれが自分の興味のある分科会に参加した。



○ワークショップ

宮城県石巻西高等学校元校長である齋藤幸男（さいとうゆきお）氏のファシリテートのもと、「避難所運営の実際と教訓～涙も笑顔もかけられることはない～」と題したワークショップが行われた。参加者は、東日本大震災での避難所の実態を聞いた後、避難所運営の組織図を作成する活動を行った。完成した組織図の多くが、本部を中心に置いた、縦割りではない組織となっており、中高生らしい柔軟な発想が見



られた。また、組織図の中には「先生の役割」だけでなく、「生徒の役割」がいくつも書き込まれており、自分ごととして避難所運営を考えられている様子が伺えた。

【震災メモリアル行事の振り返り】（会場：国立淡路青少年交流の家）

はじめに、「他人を否定しない」「自分も否定しない」「多数決禁止」「じゃんけん禁止」を活動のルールとして設定し、誰もが思ったことを話していい雰囲気を作り、少数派を切り捨てず、話し合いのもと活動を進めていくことを共有した。参加者は4～5人のグループになり、ブレインストーミングによって震災メモリアル行事で感じたことを共有し、KJ法によって意見をまとめた。その後、ワールドカフェ形式で他のグループとも意見を共有し、振り返りを深めていった。完成した模造紙は壁に掲示し、全員が感じたことを共有できるようにした。



1月14日（土）（会場：国立淡路青少年交流の家）

【壁新聞作成】

昨日設定した活動のルールを再確認して活動に入った。学校のエリアが近い3～4人グループで、各々が持ち寄った資料を用いながら、各校の取り組みを紹介しあった。その後、グループ毎の取り組みを紹介する壁新聞を模造紙で作成した。学校毎の取り組みの羅列にならないようにするために、「誰に」「何を」伝える壁新聞なのか、テーマを明確にして作成を進めていった。最後は時間が足りず「もう少し時間をください！」と声を上げるほど、熱量を持って活動に取り組んでいた。完成した壁新聞は壁に掲示し、全員が作成した壁新聞を共有できるようにした。



【パネルディスカッション】

コーディネーター：諏訪清二氏（防災教育学会 会長）

登壇者：鈴木 朔弥	（宮城県気仙沼向洋高等学校）
（生徒）川越 彩生	（兵庫県立舞子高等学校）
上園 凌	（兵庫県立松陽高等学校定時制課程）
谷田 輝星	（高知県立大方高等学校）
田中 琥太郎	（熊本県立第二高等学校）



諏訪清二氏コーディネートのもと、5名の登壇者によるパネルディスカッションが行われた。登壇者は、「イチオシの取り組み」、「自分が一番大切にしていること」、「取り組みの中で学んだこと」、「今後どのように取り組んでいきたいか」といったテーマでそれぞれの意見を述べた。また、登壇者だけでなく聴衆からも質問、意見交換が行われ、活発な話し合いが行われた。同じ「生徒」という立場の意見を聞くことができる場であることからなのか、非常に高い集中力で参加する姿勢が全員に見られた。

【講義】

講師：諏訪清二氏（防災教育学会 会長）

「災害と向き合う」と題して、災害時の被害を小さくするためには、地震や津波、台風等の「ハザードそのもの学習」と「備え」が大切であることをご講義いただいた。また、防災学習は何かと掛け合わせても行えるということ、語り継ぎは、誰かの体験の「語り」を「継ぐ」だけでも大変意味があることなどをご講義いただき、これから作成するアクションプランを後押しするような言葉をいただいた。



【アクションプラン作成】

同じ学校ではない、地域性も異なる5～6人グループで、アクションプラン（行動の計画）の作成を行った。アクションプランは、個人で作成するのではなく、グループ全員が「やりたい」と思える、共通のものを作成することとした。作成したアクションプランは最後に発表することだけを伝え、作成の方法や使用する資料、内容の方向性などは、全て各グループの自由な発想に任せた。これまでの活動の成果もあって、自然と話し合いが始まり、模造紙や付箋を活用しながら、アクションプランの内容を決めていった。



【アクションプラン発表】

アクションプランを作成したグループを3つのブロックに分け、アクションプランの発表を行った。5分程度の発表の後、他のグループから5分程度コメントを行った。コメントは、赤い付箋に「良いと思う点」を、青い付箋に「こうやったらもっと良くなると思う点」を書き、模造紙に貼り付けながら行った。

ブロックの発表が終わった後には、各ブロック代表が全体の前でアクションプランの発表を行った。最後は、全グループが作成したアクションプランを掲示し、全体で共有、相互コメントができるようにした。



1月15日（日）（会場：人と防災未来センター）

【人と防災未来センター見学】

阪神・淡路大震災の被害や復興の歴史、震災の経験を伝える取り組みを学ぶために、人と防災未来センターを見学した。

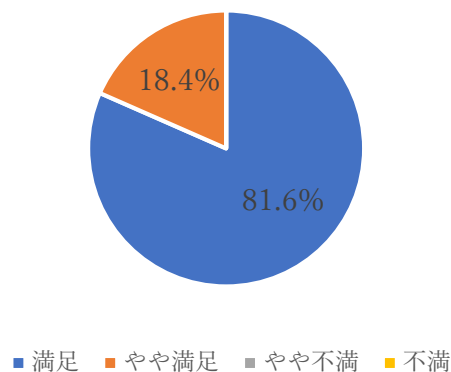
西館4階の震災追体験フロアのシアター上映や震災の記憶フロアの展示では、これまでの活動で聞いてきたことを、映像や写真という形で体感することができ、より具体的なものとして阪神・淡路大震災をイメージすることができた。また、防災・減災体験フロアやBOSAIサイエンスフィールドでは、楽しみながら防災・減災の取り組みを体験することができ、自分たちが作成したアクションプランのヒントとすることができた。



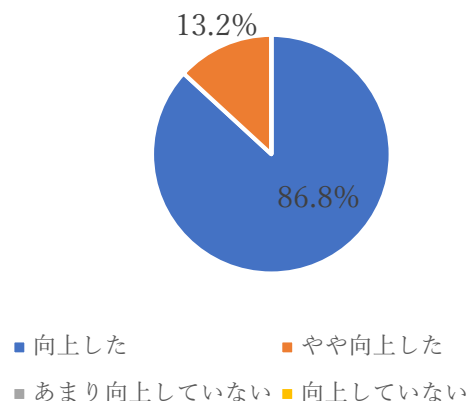
11. 事後アンケート

【生徒からの回答（回答数=38）】

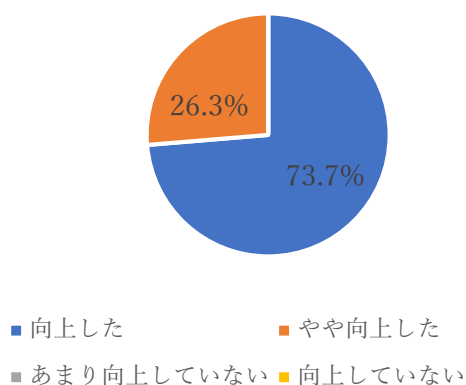
本事業の満足度を教えてください



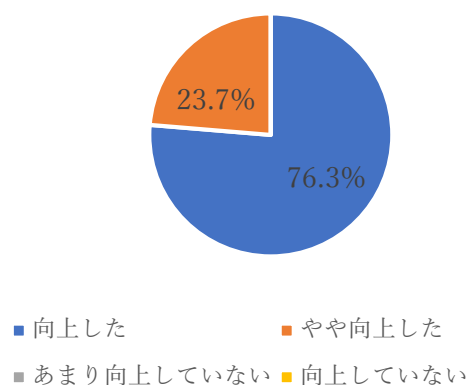
防災意識は向上したと思いますか



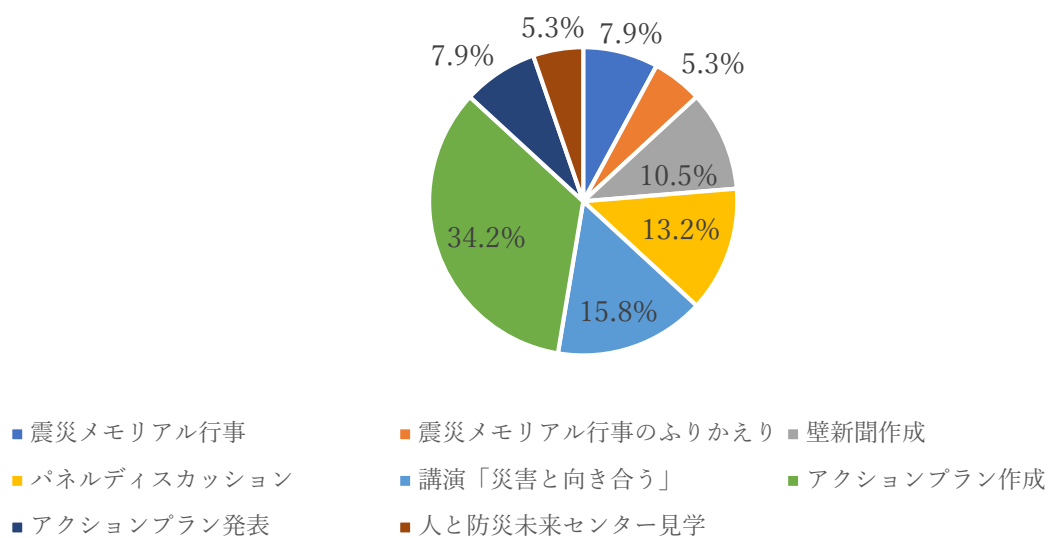
誰かと協働して課題を解決する力は向上したと思いますか



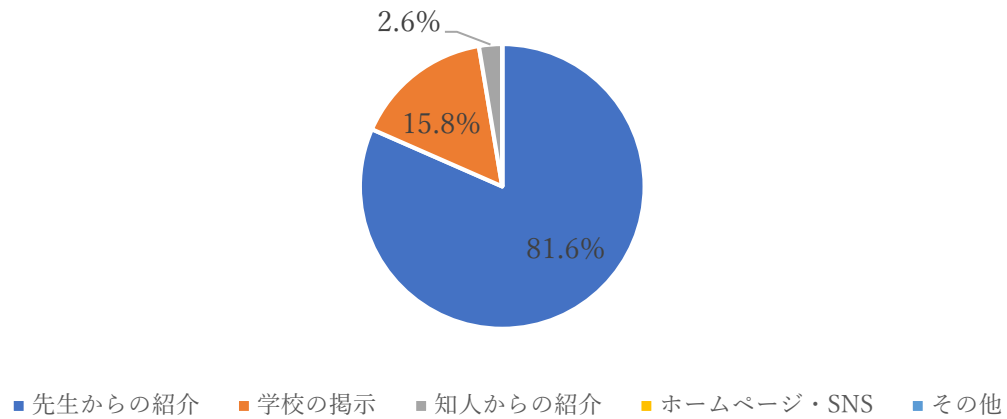
自分から行動しようとする力は向上したと思いますか



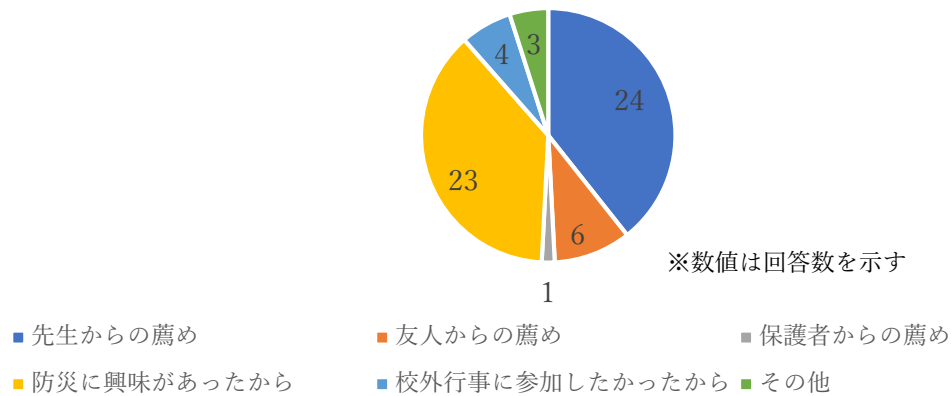
本事業の活動で最も良かったと思うものを教えてください



本事業をどのようにして知りましたか

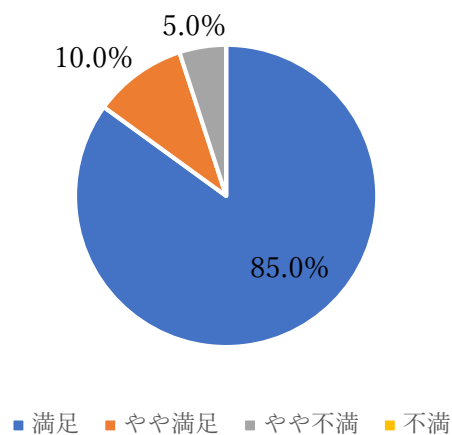


本事業に参加しようと思ったきっかけは何ですか（複数回答可）

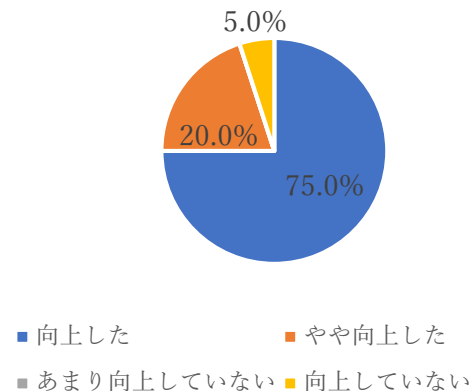


【教員からの回答（回答数＝20）】

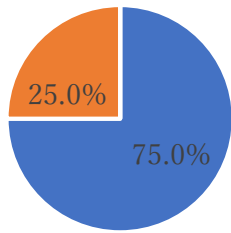
本事業の満足度を教えてください



あなたの防災意識は向上したと思いますか

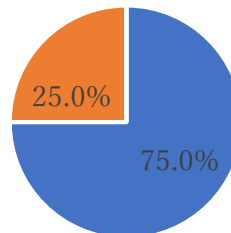


生徒の防災意識は向上したと
思いますか



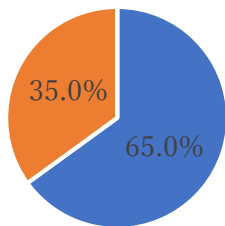
■ 向上した ■ やや向上した
■ あまり向上していない ■ 向上していない

生徒の誰かと協働して課題を解決
する力は向上したと思いますか



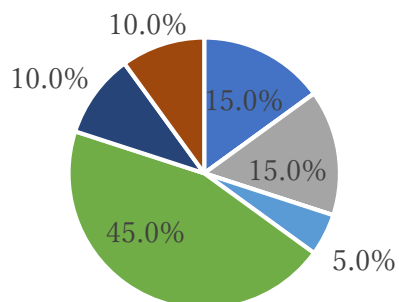
■ 向上した ■ やや向上した
■ あまり向上していない ■ 向上していない

生徒の自分から行動しようとする力
は向上したと思いますか



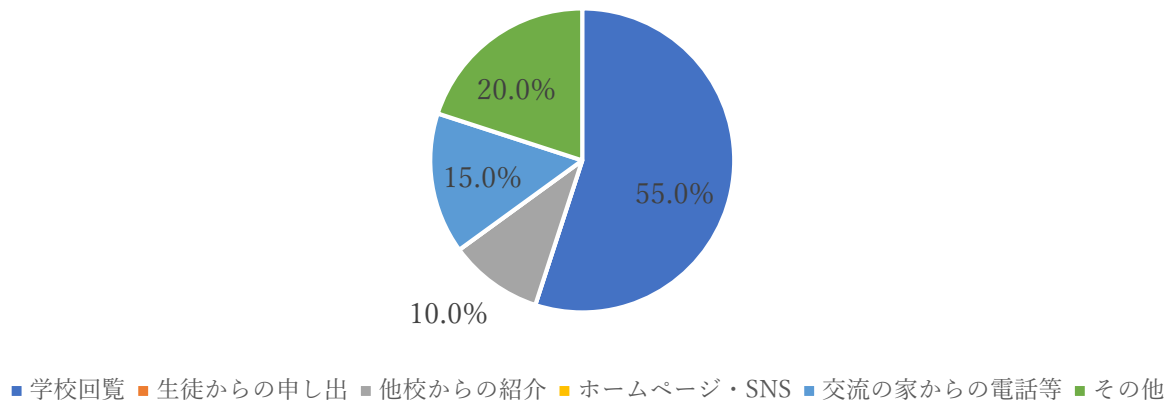
■ 向上した ■ やや向上した
■ あまり向上していない ■ 向上していない

本事業の活動で最も良かったと思うものを教えてください

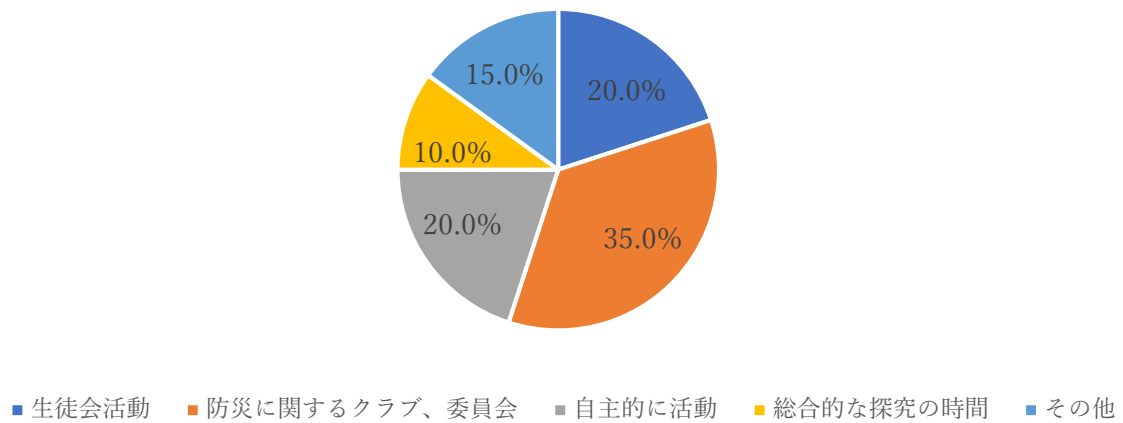


■ 震災メモリアル行事 ■ 震災メモリアル行事のふりかえり ■ 壁新聞作成
■ パネルディスカッション ■ 講演「災害と向き合う」 ■ アクションプラン作成
■ アクションプラン発表 ■ 人と防災未来センター見学

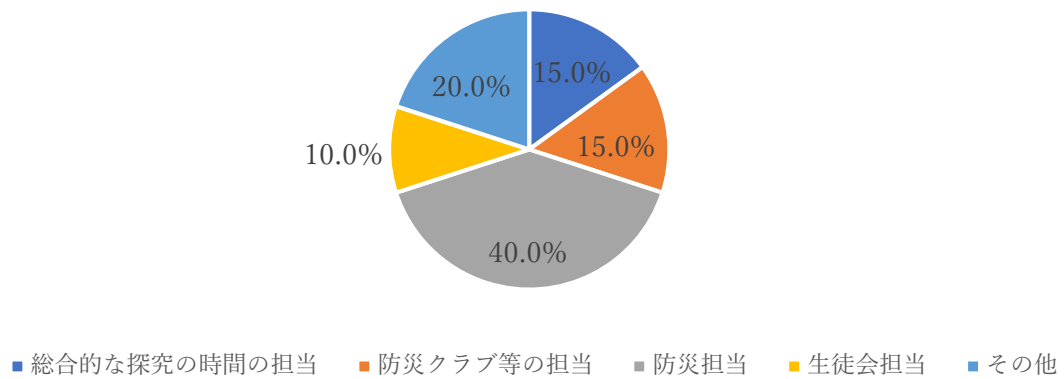
あなたは本事業をどのようにして知りましたか



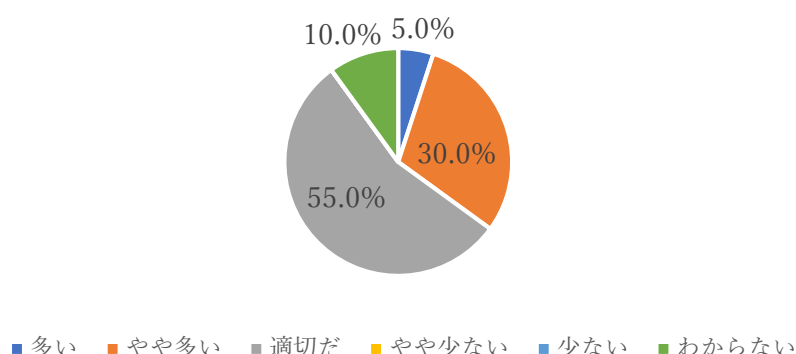
参加した生徒に最もよく当てはまるものを一つ選んでください



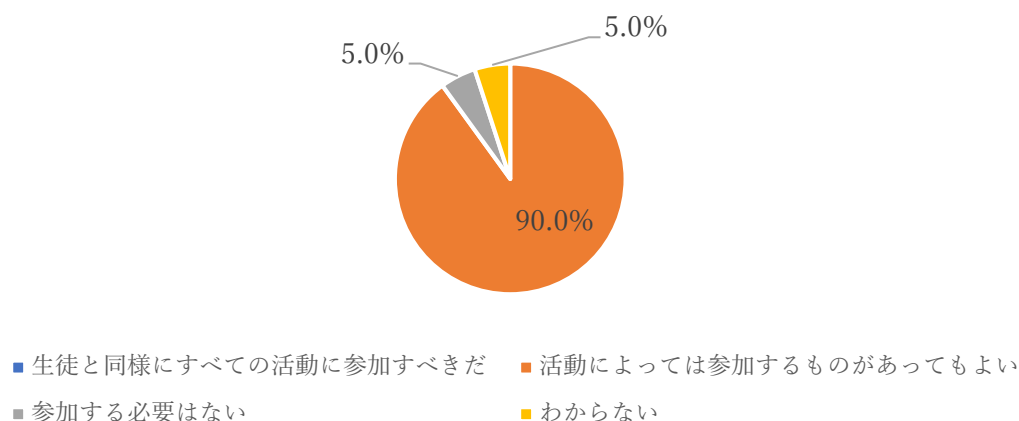
本事業の担当となった理由として最も当てはまるものを選んでください



教員の活動への参加量について、あなたの考えに最も近いものを選んでください



教員も活動に参加することについて、あなたの考えに最も近いものを選んでください



12. 事業の感想（一部抜粋）

【生徒からの感想】

- これまで考えてこなかったことや甘く考えてきたことがはっきりして、早く家に帰って何か行動しなければと思ったことは初めてでした。今後今回得たことを私の中で留めておくのではなく、少しでも多くのひとに発信して防災活動に励んでいきたいと思いました。
- 他校の人たちと交流することで各校の取り組みを知ることが出来て自分の活動に生かしたいと思えたし、自分には思い付かない考え・意見がたくさん出てきて新たな学びになったし、楽しかったです。発表する時間が多くあり、コミュニケーション力を向上できたと思います。今回の貴重な体験を生かしてこれから防災活動をしていき、語り継いでいきたいです。
- 僕も地震を経験したので、それを未来に伝えていくのが必要だと感じていました。その思いが今回の合宿を通して、より強く芽生えるようになり、自分の中で意味のあるものになって今度はそれを他の人に伝えていきたいです。
- この合宿でたくさんの講演を聞き、知らないことの方が多くて驚きました。たくさんの知識を身につけることができ、各学校の、個人の、防災や避難訓練への考えが分かりました。防災について学ぶ時

間以外でも初めて会う子に話しかけたり話しかけられたりして仲良くなって友達が増えました。自分はあまり初めて会う人に話しかけるのは得意ではないけどこの機会があったことで少しそのような点でも成長できたかなと思います。

- 最初は防災のことは少ししか知らなくてあまり興味もなかったけど、この事業を通して防災意識が高まった。興味が湧いて自分も色々行動してみようと思った。防災に対して真剣に考えている仲間がたくさんいて、色々な考えを知れたし刺激があって、自分の意欲も高まった。
- あまり防災に興味はなかったけど、今回ので興味を持ったし、いろんな学校の防災対策を知ることができたのでよかったです。大震災が起こってしまっても対策ができていれば、少しでも小さく出来るかなと思いました。
- 人の輪も広がり、それだけでも参加した価値があったと思う。自分の学校だけでは得られないような、その土地ならではの視点を共有してもらえたのが良かった。

【教員からの感想】

- 淡路から帰ってきても生徒の防災に対する思いは止むことなく、まずは全校生徒への情報共有に向けて動き始めました。この輪と熱い想いがまた広がることを切に願います。
- 生徒たちが全国から集ってきた参加者と繋がり、防災に関する情報交換はもとより、幅広いネットワークを構築できたのではないかと考える。
- わずか3日間でありましたが、1年生が手を挙げて質問したり、他校の生徒と交流したりする姿を見て、成長を感じることができました。他校の先生方ともお話しする機会があり、勉強になりました。
- 全国各地から来ている生徒と交流することで、生徒の視野が広がったように思います。私自身も防災について多くのことを学び、考えなおす機会にもなりました。
- 中高生と一緒に活動することはほとんどないので、特に中学生は勉強になったと思います。また、教師のつくったものに生徒が意見することがよかったです。いろいろな立場を知って活動を行うことが大切であると改めて感じました。

13. 成果と課題

「防災意識は向上したと思いますか」、「誰かと協働して課題を解決する力は向上したと思いますか」、「自分から行動しようとする力は向上したと思いますか」、というアンケート項目の結果から、「防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指す」という事業の目的は概ね達成できたと感じる。また、引率教員からも、生徒の「防災意識と社会参画意識の向上」について、同様の評価をしていただいている結果が得られた。防災に関する知識・技能よりも、参加者同士の交流に重きを置いてプログラムを設定したことが、このような結果に繋がったと考える。

しかし、「壁新聞作成は資料の作成だけで終わってしまい、発表や意見をする時間がなかった」や「人と防災未来センターの見学時間が短かった」など、時間に余裕のないプログラムがあったことが伺える意見も見られた。また、「淡路に来たのだから、野島断層を見学したかった」など、その土地でしか体験できないプログラムを求める意見もあった。プログラム数を精査し、一つひとつプログラムの充実を図ることや、開催地ならではの体験を提供することが今後の課題だと考えられる。